文化

「紙の国」四国巡礼

◇職人技と先端技術が近接　製紙の源流探る◇

小林良生

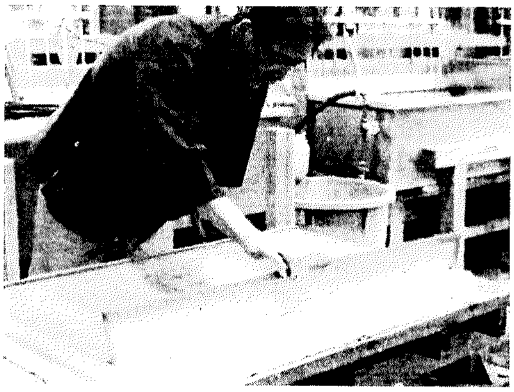
四国は紙の国である。1000年を超す紙づくりの歴史があり、山間部などに手漉き和紙の産地が多く残っている。最先端の製紙工場もあり、現在も国内屈指の産地だ。紙はとても手軽で身近ながら、さまざまな魅力がある。私は約40年にわたって紙づくりの現場などを巡り続けてきた。

私が紙に出合ったのは40代の頃だ。それまで東レで化学繊維に携わっていたが、通産省（現経産省）の研究所に転じ、高松で紙の材料となる新素材を開発することになった。そこで日本古来の知恵に手がかりを求めようと、和紙産地を訪ねるようになった。

□■□

所変われば紙変わる

和紙の一般的な作り方は、コウゾやミツマタといった原料の木の皮を灰などで煮て取り出した繊維を水にはなし、漉くことでシート状にしていく。各地で原料の加工法や漉き方が違っていて、厚さや風合いがまったく異なるものができあがる。



手漉き和紙の産地が多く残る＝アワガミファクトリー提供

四国は原材料や水が豊富な場所が多く、早くから紙づくりを始めていた。なかでも徳島は、平安初期の「古語拾遺」に紙の神である天日鷲命の子孫がコウゾや麻を植えたという伝説があるほど。昔の織物である太布との技術的なつながりもみられる。

今でも山間部などに産地が残っており、那賀町の拝宮和紙は強い障子紙で知られる。有力な製作者のひとりを訪ねると「冬は寒くて漉けませんよ」というので驚いた。「紙の寒漉き」というように、良い紙を作るのは冬という考えが定着していたからだ。

彼は兼業農家で特に市場開拓もせず、周辺の人から注文のあった量だけを漉きやすい夏に漉いていた。固定観念にとらわれず、生活に根付いた和紙づくりを目の当たりにした。

□■□

江戸時代までは秘技

高知も仁淀川や四万十川などの流域の山間部に産地が多くあり、カゲロウの羽のように薄く美しい典具帖紙を生産するいの町などで盛んだ。ただし、土佐和紙の出発は謎に満ちている。江戸時代まで製紙の技法は秘技だった。

土佐では色染めした七色紙が有名だ。長宗我部元親の妹の養甫尼が、伊予から訪れた紙漉きの新之丞らと開発したとされるが、製法の秘密を守るため新之丞が惨殺されたという伝説まで残る。真偽はともかく、和紙づくりをそれほど秘匿していたのだろう。

愛媛はいち早く紙づくりの近代化が進み、四国中央市などは静岡の富士周辺と並ぶ製紙産業の集積地になっている。今でも大王製紙グループが拠点を構えており、先端研究も盛んだ。現代では紙産業が目立たない香川も、江戸時代には高松藩が生産を奨励していた。水資源が乏しくて産地としては衰退したが、貴重な資料は多く残る。

ちなみに香川出身の発明家、平賀源内が江戸中期に「金唐革紙」を作っていたことも分かった。金唐革紙とは、中世の欧州で貴族の邸宅の壁の装飾などに使われた革を模造した和紙で、明治期に一大産業となった。

四国だけでなく、全国のすべての主要産地を訪れたが、100カ所は超えているだろう。越前や美濃などきわめて良い紙を作るところも少なくない。そのなかで四国の特色というと、製作者の多様性だろう。古来の職人技と先端産業が近接しており、互いに学び合って新たな発想を生み出す土壌がある。

□■□

海外の製法も調査

製紙技術の源流を訪ねたこともある。海外機関との共同研究でタイに滞在した際、古来の技法を残すであろう少数民族の紙づくりを調べたのだ。東南アジアでは日本の和紙の製法に似た作り方などのほかに、原料の植物をどろどろに腐らせて繊維を取り出す方法があることも分かった。

これが製紙の原型と考えて作業現場を見ようと、ラオスのヤオ族を訪ねた。しかし乾期で製紙ができず、視察が空振りに終わったのは心残りだ。

魅力にあふれた和紙だが、生産コストが高く衰退してきている。私の産地巡りの一端は「四国は紙國」（美巧社）などにまとめて出版できたが、これまで蓄えてきた知識を役立てて、和紙など製紙の振興に尽力したい。（こばやし・よしなり＝紙研究家）